

(有)西川経営オフィスサービス  
**中村会計**  
**事務所便り**  
 2011年1月17日(月) NO.164  
**地域から明るい未来を作ろう**

# 逆風に立ち 鮮やかに勝利を

歴史は勝利によってのみ語られる、失敗は表に出ない。平原で平和に飼い慣らされた豚になるより、プライドを持ち凍えて死ぬ狼になりたい。内なる狂気の火が燃えたいがるように。

そもそも大それたことをやろうと思わない限り、何も始

まらない。精神を満たす報酬が「生」を豊かにする。無報酬からより多く「報酬」を得る。またよく学ぶものだ。それ自体は自己満足でもありが。

人はすべて死に行く人なのである。死ぬ間際に振り返り、必ず感謝しつつ多くの出来なかつた事を後悔するものだ。

死ぬことを強烈に意識することで思考に影響を与える過酷な条件の中で鮮やかに勝つことは大きな快感である。男は死の恐怖を紛らわせるものに「仕事、恋愛、家族」の三がある。



この三つのどれかに逃げ込めれば、男にとって本望である。

豊かな「生」を生きること、は、生きていく者として「死」をどれだけ重くとらえているかでしよう。

その人は自分の出した結果に寄りかかり始めた時から、人は既に腐り始めていた。思っているより、明日を知らぬ身に我が身を追い込めなければ、気がつかぬまま腐臭を放つだけだろう。誰とは言わぬが実際、句己はどうか・・・？



## 温故創新

今日本にいて何もしないのが最大のリスクで、本当の危機である。これまで何回も書いています。発想の転換が生きる基本、会社を持つている資産(人・物・金)を生かすことです。

「温故知新」ではなく「温故創新」が時代のキー・ポイントです。会社が持っている資産・コアの技術を生かすことです。

このためのキーワードは、トップ自らが現場を深く見て、問題を整理し、リスクを取り「果敢」すること。小さな事から人を育ててこそ会社が成長するのです。

そして意志決定のスピードが決定的な役割を果たします。変化の時代トップの朝令暮改は、なんら恥じる事ではない。朝令し暮改しない、経営者の萎縮こそが最大のリスクです。

経営者の小さな勇気の積み重ねの連続が『果敢』を生み出します。地道な積み重ねの中で、チャンスが醸造され、生かされる糧が生まれるのです。

## 寒の入り

小寒とも言います。今年一月六日からです。立春(節分)の前の日までが寒です。年が明けて新春ではありません。一年で一番厳しい寒さが続きます。寒中見舞いの時期です。私たちは暦から宇宙の一部、自然の一部だと知る。

暦には旧暦(月歴)と新暦(太陽暦)があります。日本は明治六年に太陽暦に変わり、それまでは旧暦でした。太陽暦は、お盆は七月十五日ですが、旧暦では八月十五日です。私たち民族のDNAなのでしょうが、旧暦が体に馴染みます。旧暦のお正月(春節)は、一月二十二日ごろから二月十九日ごろまでを毎年移動します。日本では節分のころです。

今、ベトナム戦争「テト攻勢」の映像を思い出す。

